

姫路城城下町跡

—姫路城跡第375次発掘調査報告書—

2018

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、日本が誇る世界遺産の一つです。江戸時代のはじめに池田輝政によって五重六階、地下一階の連立式天守が築かれて以来、400年を経た現在も威容を誇っています。姫路城下町は、姫山・鷲山を中心に螺旋状に巡らされた三重の堀によって、天守をはじめ城の中核施設が置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地・寺社を中心とした外曲輪に区分されます。このうち内曲輪・中曲輪の大半は世界遺産及び国の特別史跡として登録・指定され、保護・顕彰が図られています。

一方、町人地を中心とする外曲輪は、江戸時代以来、播磨地域の経済の中心地として発展し、現在も中核都市に相応しいまちづくりが進められています。今回調査を行った元塩町は、江戸時代には西国街道が町内を通り、本町、綿町に並ぶ町人地であったといわれています。そうした一画で発掘調査を実施し、多くの遺構・遺物を確認することができました。ここにその成果を報告し、姫路城跡の調査・研究の進展に資する所存であります。

最後に発掘調査の実施にあたり、多大なご協力を賜りました事業者様をはじめ、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

平成30年(2018年)3月31日

姫路市教育委員会

教育長 中杉 隆夫

例言・凡例

1. 本書は姫路市元塩町132番地で実施した姫路城跡第375次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、共同住宅の建設に先立って実施した。
3. 現地調査及び整理作業、報告書の編集は姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターがおこなった。
4. 調査区平面図の作成に際しては世界測地系を使用し、本書で使用する方位は全て座標北である。また、標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。
5. 土層名は、『新版標準土色帳』（1999年度版）に準拠した。
6. 本書で使用する遺構番号は、通し番号を付し、遺構の種類を前につけた。遺構番号は、調査時に使用したものを基本的に踏襲している。遺構種略号は次のように呼称する。
SK：土坑、SE：井戸、SD：溝
7. 本書に関わる遺物・写真・図面等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。

現地調査開始から整理作業終了までの体制

姫路市教育委員会

教育長 中杉隆夫

教育次長 名村哲哉

生涯学習部

部長 岡田俊勝

文化財課

課長 花幡和宏

課長補佐 大谷輝彦

埋蔵文化財センター

館長 前田光則

課長補佐 岡崎政俊

係長 森恒裕

技術主任 小柴治子

中川 猛

福井 優

南 憲和

関 梓

技師 黒田祐介

主事 岡本武平

技師補 山下大輝

(～平成29年9月30日 技術員)

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1SK26 断面状況 (東から)
第1節 調査に至る経緯……………1	1SK80 断面状況 (西から)
第2節 調査の経過……………1	1SE76 検出状況 (南西から)
第2章 遺跡の立地と環境……………1	1SE77 検出状況 (北東から)
第3章 調査の結果	1SK101 検出状況 (西から)
第1節 調査地の基本層序……………2	写真図版 4 1SK136 検出状況 (南西から)
第2節 江戸時代以降の遺構……………2	1SK136 石造物出土状況 (南西から)
第3節 江戸時代以前の遺構……………5	1SP106 検出状況 (西から)
第4章 遺物	1SP106 断面状況 (東から)
第1節 遺物の概要……………6	1SK201 検出状況 (北から)
第2節 土器類……………6	1SK201 底面状況 (北から)
第3節 瓦類……………7	写真図版 5 1SK218 全景 (北から)
第4節 その他……………7	写真図版 6 1SK218 断面状況 (東から)
第5章 総括	1SK218 南面石積み状況 (北から)
第1節 江戸時代以降の様相……………7	1SK218 堆積状況 (東から)
第2節 江戸時代以前の様相……………8	1SK218 堆積状況 (東から)
参考文献・図版引用文献	1SK206 断面状況 (南から)
図版目次	1SK212 断面状況 (西から)
図 1 調査地位置図	1SK219・220 断面状況 (北から)
図 2 調査区壁面実測図	1SE308 検出状況 (南から)
図 3 第1面敷地境石列平面図	写真図版 7 北区第2面全景 (南から)
図 4 第1面平面図・各遺構断面図	南区第2面全景 (北から)
図 5 道路側溝実測図	写真図版 8 2SD5 検出状況 (北から)
図 6 1SK218 実測図	2SD303 断面状況 (西から)
図 7 第2面平面図・各遺構断面図	2SD5・2SD303 断面状況 (北から)
図 8 遺物実測図 1	2SD302 断面状況 (東から)
図 9 遺物実測図 2	2SD304 断面状況 (東から)
図 10 遺物実測図 3	2SK310 断面状況 (西から)
表 1 遺物観察表	2SK1 断面状況 (西から)
写真図版目次	
写真図版 1 北区第1面全景 (南から)	
南区第1面全景 (北から)	
写真図版 2 道路側溝検出状況 (北西から)	
道路側溝石列検出状況 (西から)	
道路側溝石列検出状況 (北東から)	
道路側溝石列検出状況 (北から)	
写真図版 3 1SD20 検出状況 (東から)	
1SK26 土器検出状況 (東から)	

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

姫路市元塩町132番他において集合住宅建設が計画された。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡番号：020169）に所在する。

平成28年12月15日付で事業者より文化財保護法第93条に基づく届出が姫路市教育委員会宛にあった。届出の内容に基づいて協議を行い、平成29年1月24日から1月26日にかけて敷地内の4箇所において確認調査を実施した。調査の結果、全ての調査区で遺構・遺物が良好に残存していることが確認できたことから、兵庫県教育委員会からの通知に基づいて、工事により遺構面が影響を受ける210㎡を対象として、記録保存を図るため本発掘調査を実施することとなった。平成29年4月6日に姫路市と事業者とで委託契約を締結し、調査を開始した。

第2節 調査の経過

調査は、敷地内で残土置場を確保するため、2分割して実施した。平成29年4月18日に敷地北側（以下、北区）から調査を開始し、6月6日から南側（以下、南区）に調査を進めた。確認調査の成果から遺構面を2面調査した。調査はバックホウで盛土・造成土等を除去した後、人力で遺構検出、遺構発掘を行い、適宜、記録写真撮影、遺構実測を実施した。また調査成果を公開するため、平成29年7月1日に現地説明会を実施し、同日、現地作業の全てを終了した。現地調査終了後、姫路市埋蔵文化財センターにおいて出土品整理等を実施し、本発掘調査報告書の刊行をもって事業を完了した。

第2章 遺跡の立地と環境

姫路城城下町跡は、姫路市域を南北に流れる市川と夢前川によって形成された神積平野のほぼ中央に立地する。姫路平野には古代より東西交通の要である山陽道が通り、東は丹波・有馬方面、西は美作・因幡方面に通じる。また南の海上には瀬戸内海航路があるなど陸海の交通の要衝であった。こうした地理的要因を背景として近世姫路城は成立した。池田輝政により、慶長6年（1601）から8年をかけて築城された姫路城は、平野部と独立丘陵である姫山・鷲山を利用した平山城である。市川の支流である船場川を西限とし、三重の堀によって内曲輪、中曲輪、外曲輪と縄張りされる（図1）。

調査地は、外曲輪のうち中堀南東隅のすぐ外側に所在する。調査地が位置する元塩町は町人地であり、『本町・綿町・元塩町日記丁格録』に「三丁町之儀は、往古より御城下町頭丁と被為成置」とあるとおり「頭丁」の一つであった（三浦1997）。調査地南側の東西道路は、近世山陽道（西国街道）である。戦後の区画整理により幅員等は変更されたものの、江戸時代の位置を踏襲している。姫路城城下町の絵図は江戸時代を通じて多く残されているが、町人地の住人あるいは所有者についての情報を記す絵図は少なく、調査地についてもその詳細は不明な点が多い。

調査地は播磨国府推定地である本町遺跡にも一部該当している。調査地に近い平野町では平成27年度の発掘調査で大量の古代瓦が出土した（姫路城跡第338次調査、姫路市埋蔵文化財センター 2017）。今回の調査地でも播磨国府（国衙）に関連する遺構等の検出が予想された。

第3章 調査の結果

第1節 調査地の基本層序

調査地の層序は地点によって異なるため、調査区東壁を基準として述べる（図2）。現地表は標高13.90m～14.18mで南から北へとやや傾斜する。地表面から0.14m～0.28mまでが現代盛土、その下に0.16m～0.34mの厚さで第二次世界大戦時の焼土層（以下、戦災焼土層）がみられる。以下、0.28m～0.54mの厚さで近代以降の土層、0.28m～0.40mの厚さで近世整地層、0.20m～0.24mの厚さで中世耕土及び土壌化層が順に堆積し、この下層に褐色細砂土からなる地山がある。

第2節 江戸時代以降の遺構

町屋の敷地境と思われる石列、西国街道の側溝の他、土坑、石組土坑、礎石、柱穴、井戸等があり、時期はいずれも江戸時代以降である（図4）。遺構番号の前に「1」を付した。以下に主要遺構の詳細を記す。

敷地境石列（図3） 調査区中央部で検出した石列である。検出面での規模は、南北約24.2m、幅0.2m～0.6mである。石列上面の標高は13.3m～13.4mである。直上には戦災焼土層が堆積し、石列の一部には被熱痕跡が確認できる。直下には近世整地層が認められる。石列を検出した位置の下部からは、ほとんど遺構が検出されなかった。このことは石列が位置する部分は長期間にわたって他の土地利用が行われなかったことを示している。下部からは類似する遺構は検出されなかったものの、この石列は町屋の敷地を区画する境界遺構であり、江戸時代を通じて踏襲されたものとみることができよう。また同位置では近世整地層上面に石が据え付けられており、敷地境は戦時中まで位置を変えずに機能していた可能性がある。

道路側溝（図5） 調査区南端部で東西方向に延びる石列を検出した。検出面での規模は、東西1.05m以上、南北0.37mである。石列の標高は、石の上面で13.3m～13.4mである。調査区を横断して東西に延びるものと考えられる。掘形は近世整地層を切り込んで形成されることから、江戸時代後半には機能していたとみられる。調査地は西国街道に面しており、また北端の上層に存在する現在の道路側溝とも位置がほとんど同一であることから、今回検出した石列は、西国街道北側に付属する側溝の一部である可能性が高い。

礎石 調査区北西部で検出した2基の礎石である。このうち礎石1は最大長0.5mを測り、礎石2は最大長0.4mを測る。礎石1と礎石2の2石間の距離は約4.0mを測る。ただこの2基以外に関連する礎石等は認められず、建物を構成するかどうかを検討することはできなかった。またこの礎石の時期については、掘形からは遺

物が出土しなかったが、江戸時代後半の染付碗が出土している1SK117を切り込んでいることから、江戸時代後半以降のものであることがわかる。

1SD20 調査区北東部で検出した。検出面での規模は東西2.7m以上、幅0.78m、深さ0.18mである。溝の西端には円形の集石が配されていた。このことから、集水枡のような機能を想定することが考えられる。埋土から遺物は出土していない。

1SK26 調査区西部で検出した。検出面での規模は南北0.78m、東西1.0m、深さ0.4mである。掘形は隅丸方形を呈する。埋土からは丹波焼の鉢(図8-3)、肥前系陶器の壺(図8-4)などが出土した。出土遺物から江戸時代後半の遺構であると考えられる。

1SE76 調査区東部で検出した石組井戸である。検出面での規模は径2.28m、深さ1.7m以上である。掘形は円形を呈する。埋土からは備前焼の壺(図8-7)などの江戸時代後半から近現代の遺物が出土した。遺構の様相から江戸時代後半に掘削された井戸が近現代になって埋められた可能性が高い。

1SE77 調査区中央部で検出した石組井戸である。検出面での規模は径2.0m、深さ1.6m以上である。掘形は円形を呈する。埋土からは近世後半から近現代の遺物が出土したほか、一石五輪塔(図9-33)も出土した。井戸の時期としては1SE76と同様である。

1SK80 調査区北東隅で検出した。検出面での規模は南北1.5m、東西1.6m、深さ0.28mである。掘形は方形もしくは長方形を呈すると考えられる。出土遺物は焙烙(図8-15～17)焼締陶器(図8-12、14)、施軸陶器(図8-13)などであり、江戸時代後期から幕末の遺構であると考えられる。

1SK95 調査区南部で検出した。検出面での規模は、径0.62m、深さ0.14mである。掘形は円形と呈すると考えられる。埋土からは焙烙(図8-9)、焼締陶器(図8-8)が出土した。出土遺物から江戸時代後期の遺構であると考えられる。

1SK99 調査区中央部で検出した集石状の遺構である。検出面での規模は南北1.55m以上、深さ0.42mである。掘形は楕円形を呈すると考えられる。埋土からは近世前半の土師器、焼締陶器、施軸陶器などが出土した。

1SK101 調査区西部で検出した。1SK26に切り込まれる。検出面での規模は、南北1.3m、東西1.4m、深さ0.32mである。掘形はおよそ円形を呈する。埋土からは土師器皿(図8-6)が出土したのみで遺構の詳細な時期は判然としない。

1SK136 調査区中央部で検出した集石状の遺構である。検出面での規模は南北1.8m、東西1.22m、深さ0.16m

である。掘形は楕円形を呈する。埋土からは土師器（図9-19）、瓦質土器（図9-18）、石造物（図9-32）、獣骨が出土した。このことから埋葬施設の可能性も考えられる。

1SK201（図5） 調査区南部で検出した。検出面での規模は南北2.8m、東西1.4m、深さ1.19mである。掘形は長方形を呈する。内部は四方を漆喰で塗り固めており、底部には木片が敷かれていることから槽であると考えられる。埋土からは棧瓦をはじめとする瓦類が多量に出土した。遺構の時期については瓦のみの出土のため判然としないものの、大多数が棧瓦であることから、江戸時代後期には機能していたものと考えられる。敷地境石列に隣接しており、また西国街道に面した町屋の入口付近に比定されることから、なんらかの保存あるいは生産に関わる施設と思われる。

1SK206 調査区西部で検出した。検出面での規模は径0.66m、深さ0.2mである。掘形は楕円形を呈する。埋土は2層に分かれ、近世前半の土器類が出土した。

1SK212 調査区南西部で検出した。径2.48m、深さ0.46mである。掘形は楕円形を呈する。埋土は3層に分かれ、上層から暗オリーブ褐色砂泥、炭が混じる暗灰黄色砂泥、灰黄褐色シルト混じり細砂である。これらの層の形成時期に明確な差があるかどうかは不明である。埋土下層から近世前半の焙烙（図9-21）が出土したが、上層からは近世以降の土器も出土しており、混入の可能性も否めない。

1SK214 調査区南西部で検出した。検出面での規模は径0.94m以上、深さ0.6mである。掘形は楕円形を呈すると考えられる。埋土は2層に分かれる。埋土からは土師器（図9-26）、施釉陶器（図9-24、25）などの土器類が出土した。江戸時代前半の遺構であると考えられる。

1SK215 調査区東部で検出した。検出面での規模は径1.2m、深さ0.24mである。掘形は楕円形を呈すると考えられる。埋土は5層に分かれる。施釉陶器（図9-22、23）などの江戸時代前半の土器類が出土した。

1SK218（図6） 調査区東部で検出した石組み土坑である。検出面での規模は南北1.88m、東西1.25m、深さ0.51mである。掘形は長方形を呈する。埋土は8層に分かれる。最下層に暗灰黄色シルト質粘質土を厚さ0.01m～0.05mで貼り付けており、水漏れの防止を意図したものと考えられる。これらから1SK218は小規模な石組みの池であると考えられる。埋土からは唐津焼折縁皿、唐津焼鉢（図9-27、28）などが出土した。また図化に基えるものではなかったため掲載していないが、共存する瓦片も近世前半におさまるものであると考えられる。これらのことからこの石組み池は17世紀前半代に腐絶したものである可能性が考えられる。

1SK219 調査区中央部で検出した。検出面での規模は、径1.17m、深さ0.45mである。1SK220に切られる。埋土からは近世の土器類、瓦類が出土した。棧瓦が出土することから江戸時代後期の遺構であると考えられる。

1SK220 調査区中央部で検出した。検出面での規模は、径2.65m、深さ0.83mである。埋土からは近世の土器類、瓦類が出土したが詳細な時期比定が可能な遺物は確認できなかった。

1SE308 調査区東部で検出した。検出面での規模は東西1.24m、深さ1.29mである。掘形は隅丸方形を呈する。井戸の構造は石組みであるが、残存する石材は少なく底面に残存する程度である。埋土から遺物は出土しなかったが、石組みの規模、構造から近世のものであると考えられる。

第3節 江戸時代以前の遺構（図7）

地山面で検出した遺構である。土坑、柱穴、溝、井戸等があり、遺構番号の前に「2」を付した。時期は奈良時代、室町時代である。以下では主要遺構の詳細を記す。

2SK1 調査区北部で検出した。検出面での規模は径1.49m、深さ0.5mである。掘形は円形もしくは楕円形を呈すると思われる。埋土は3層に分かれ、上層から黄褐色シルト質細砂、灰黄褐色粘質土、にぶい黄褐色細砂である。古代の瓦類が多量に出土した（図10-40、41、42）。ただ出土状況から瓦は一括投棄されたものとは考えにくく、使用されていた時期と土坑に廃棄された時期に時間差がある可能性も考えられる。

2SD5 調査区東部で検出した。北北東から南南西方向に延びる。検出面での規模は南北14.5m、幅1.1m、深さ0.38mである。溝の断面形態は逆台形状を呈する。埋土は4層に分かれ、上層からにぶい黄褐色シルト混じり細砂、黄褐色シルト質細砂、灰黄褐色シルト質細砂、暗灰黄色シルト質粘質土が堆積する。埋土からは土師質羽釜（図9-30）、備前焼播鉢（図9-31）が出土した。2SD5の北端は第1面の1SE76によって切られているが、それよりも北西方向及び東方向に延びることはない。南西方向に直角に曲がる可能性が残されるが、調査区西壁にも溝らしき堆積は確認できなかった。溝の時期は出土遺物から15世紀頃には埋まったと考えられる。

なお、本遺構は調査区南端まで直線的に延びているが、検出時の土色の違いから調査段階では1SK218以南を別遺構2SD301とした。当該部の埋土は、上層から褐色シルト質細砂、にぶい黄褐色シルト質粘質土と2層に分かれる。以下、本書では便宜上2SD301を別遺構として記述している。

2SD302 調査区西部で検出した。西北西から東南東方向へと延びる。検出面での規模は、東西4.1m、幅0.96m、深さ0.24mである。溝の断面形態はU字状を呈する。溝の東端は近世以降の遺構により攪乱され、2SD301の断面でも溝状堆積を確認することはできなかった。埋土は2層に分かれ、上層からにぶい黄褐色シルト質細砂、にぶい黄褐色シルト混じり細砂が堆積する。埋土からは瓦片が出土した。時期については判然としないうが近世遺物が含まれない点や出土した瓦片が近世のものとは考えにくいことから、近世以前の遺構と判断した。

2SD303 調査区南西部で検出した。西北西から東南東方向へと延び、東部は北東方向に屈曲する。2SD301

に切り込まれる。検出面での規模は東西約7.0m、幅0.46m、深さ0.06m～0.28mである。溝の断面形態は緩やかなU字状を呈する。埋土は西部ではにぶい黄橙色シルト質細砂、東部では灰黄褐色シルト質細砂であった。遺物は出土しなかった。

2SD304 調査区南西部で検出した。検出面での規模は東西0.8m、幅0.3m、深さ0.05mである。西部は擾乱を受け、東部を1SK212に切られる。遺物は出土しなかったものの、検出状況や埋土から近世以前の遺構と考えられる。

2SK310 調査区南西部で検出した。検出面での規模は径0.4m、深さ0.25mである。掘形は楕円形を呈する。埋土は3層に分かれ、上層から褐色細砂、にぶい黄褐色シルト混じり細砂、にぶい黄褐色シルト砂泥である。埋土からは瓦片が出土しており、近世以前の遺構であると考えられる。

第4章 遺物

第1節 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、整理用コンテナに51箱分である。出土遺物には土器類、瓦類、ガラス製品、金属製品などがある。そのうち土器類が大半を占め、次いで瓦類が多い。時代別では近世以降のものが大半である。奈良時代から室町時代の遺物も出土したが、量は少ない。以下では、先述した主要遺構から出土した遺物を中心に紹介する。

第2節 土器類

図8-1は染付の播鉢である。盛土除去時に出土した。3は丹波焼鉢である。4は唐津焼の鉄絵唐草文壺である。近世初頭のものであると考えられる。3と4は1SK26から出土した。5と6は土師器皿である。5は1SK74、6は1SK101から出土した。7は備前焼の壺である。内面に鉄漿が付着することからいわゆる「お歯黒壺」であると考えられる。1SE76から出土した。8は焼締陶器の小壺である。底部外面に一字状の刻印が施される。9は焙烙である。体部には直径0.4cmの透かし孔が穿たれる。8、9は1SK95から出土した。10は染付の碗である。11は備前焼の鉢である。10、11は1SK117から出土した。12は焼締陶器の灯明皿である。13は施釉陶器の蓋である。14は焼締陶器播鉢である。大坂・堺・明石産のものと考えられる。15～17は焙烙H類である(中川2012)。12～17は1SK80から出土した。図9-18は瓦質土器の香炉である。18は土師器鍋である。口縁部以下の外面には、煤が付着する。1SK139から出土した。21は焙烙A類である。体部全面にはタタキ調整が施される。1SK212下層から出土した。22は肥前系陶器の皿である。23は瀬戸焼の折縁ソギ皿である。内外面に鉄軸が施される。1SK215から出土した。24、25は肥前系陶器の皿である。26は焙烙である。口縁部内面にヨコナデを施す。体部にはタタキ調整を施す。1SK214から出土した。27は唐津焼折縁皿である。

28は唐津焼の鉢である。27は1SK218の4層、28は1層から出土した。29は土師質羽釜である。鈔部は粘土を貼り付けて形成する。体部外面にはタタキ調整が施される。2SD301から出土した。30は土師質羽釜である。29と同一の調整が施される。2SD5下層から出土した。31は備前焼播鉢である。播り目は1単位7条である。時期は15世紀半ばと考えられる。2SD6から出土した。

第3節 瓦類

図10-34は左巻き三巴文軒丸瓦である。丸瓦凹面から鉄線切りによって粘土を切り取ったことがわかる。近世整地層検出中に出土した。35は左巻き三巴文軒丸瓦である。瓦当下面部は褐色を呈し、二次的に被熱したものと考えられる。盛土除去時に出土した。36は軒棧瓦である。軒平瓦部の顎接合部には指ナデが施される。近世整地層検出中に出土した。37は平瓦である。狭端部に「苦瓜佐四郎」との刻印が施される。1SK201から出土した。38は右巻き三巴文軒丸瓦である。瓦当面には多量の雲母が付着することから、瓦范との剥離材として使用されたものと考えられる。1SK201から出土した。39は軒棧瓦である。軒平瓦部のみが残存している。軒平瓦部は中心飾り宝珠文の三回反転均整唐草文である。顎接合部には指ナデが施される。1SK201から出土した。40、41、42は播磨国府系瓦の軒平瓦で、いずれも古大内式である。曲線顎を呈する。平瓦凹面は横方向のケズリを平瓦凸面部には縦方向のケズリを施す。2SK1からの出土である。

第4節 その他

図8-2はガラス製瓶である。底面外面は緩やかに窪む。盛土除去時に出土した。図9-32は石造物で相輪部である。1SK136から出土した。33は一石五輪塔の火輪・水輪部である。1SE77から出土した。

第5章 総括

第1節 江戸時代以降の様相

今回の調査の主要な成果として、以下の3点を挙げておきたい。まず、調査区南端で西国街道北端に付属する石組み溝を確認したことである。今回の調査地でみ限り、西国街道の北端の位置は江戸時代以後ほぼ変化することなく現代まで継承されているものと評価できよう。

次に調査地中央部で南北方向に延びる敷地境の石列を検出したことである。調査地が2軒の町屋にまたがっていることがわかる。石列は戦災焼土層直下に位置し、一部に被熱痕跡が残ることから、比較的近年まで機能していた可能性が高い。しかし、石列直下にあたる部分では近世の土坑などの遺構をほとんど検出してない。改修の痕跡等を確認することはできなかったものの、敷地境の位置が江戸時代を通じてほぼ変化しなかったことを示唆していると考えられよう。

3点目は、遺構の分布状況から町屋の空間構成を把握できたことである。調査地は西国街道に面して間口が開かれていたと思われる。西国街道北端の石組み溝を基準として検出した遺構の位置をみると、北側13.5mまでは土坑等の遺構がほとんど認められない。礎石等、建物に直接関連する遺構は認められなかった

が、この部分に主屋が建っていた可能性が高い。その北側には土坑、井戸などが掘られ、また小規模ながら池の可能性がある1SK218が存在することから、主屋裏手の庭など空地であったと考えられる。こうした町屋の空間構成は既往調査でも繰り返し確認されており、時期による遺構の変遷などは把握できなかったものの、今回の調査でもこれを追認する成果を挙げることができた。

第2節 江戸時代以前の様相

古代の遺構としては、瓦が大量に出土した土坑2SK1がある。出土した瓦は大半が平瓦であったが3点の古大内式軒平瓦を確認した。調査地は播磨国府（国衙）に比定される本町遺跡の範囲に一部該当しており、周辺部での既往調査成果を勘案すれば、当該地周辺にも国府（国衙）に関連する遺構が存在した可能性は極めて高い。

中世の遺構と考えられるものには、土坑、溝、柱穴等がある。土坑、柱穴については分布がきわめて散漫であるため、ここでは溝についての知見を記す。溝の方向は2SD301が真北から東に約13度、2SD302が真東から南に約6度にそれぞれ振れる。機能時期については、2SD301以外では遺物の出土が皆無に等しく判然としない。2SD301は、15世紀ごろの備前焼播鉢や土師質羽釜が出土し、2SD303からも土師器片が出土したことから、少なくとも2SD301は15世紀半ばには埋まったと考えられる。とりわけ2SD301については、上面で検出した敷地境石列と位置及び方向がほぼ一致していることが注目される。江戸時代以前に形成されていた地割が近世城下町の町割りに影響を及ぼしている可能性も考えられよう。しかしこの可能性を客観的視点から推す根拠は現状では乏しい。溝が水路であるのか区画機能を持ったもののかについても、今後の調査成果とともに精査する必要がある。

以上、今回の調査成果をまとめた。調査地において中世から近世、近世から現代までの変遷を断片的ではあるが、考古学的な知見から明らかにすることができた。今後の発掘調査成果に期待してまとめたい。

参考文献・図版引用文献

- 今里幾次 1995 『播磨古瓦の研究』 真陽社
- 白神典之 1992 「堺播鉢考」『東洋陶磁』第19号 東洋陶磁学会
- 中川 猛 2012 「焙焙—姫路と周辺の焙焙—」『山口大学考古学論集Ⅱ』
中村友博先生退官記念論集作成委員会
- 姫路市教育委員会 2013『姫路城城下町跡—姫路城跡第289次発掘調査報告書—』姫路市教育委員会
- 姫路市教育委員会 2017『姫路城城下町跡—姫路城跡第338次発掘調査報告書—』姫路市教育委員会
- 姫路市教育委員会 2017『姫路城城下町跡—姫路城跡第343次発掘調査報告書—』姫路市教育委員会
- 姫路市教育委員会 2017『姫路城城下町跡—姫路城跡第354次発掘調査報告書—』姫路市教育委員会
- 三浦俊明 1997『譜代藩城下町姫路の研究』 清文堂

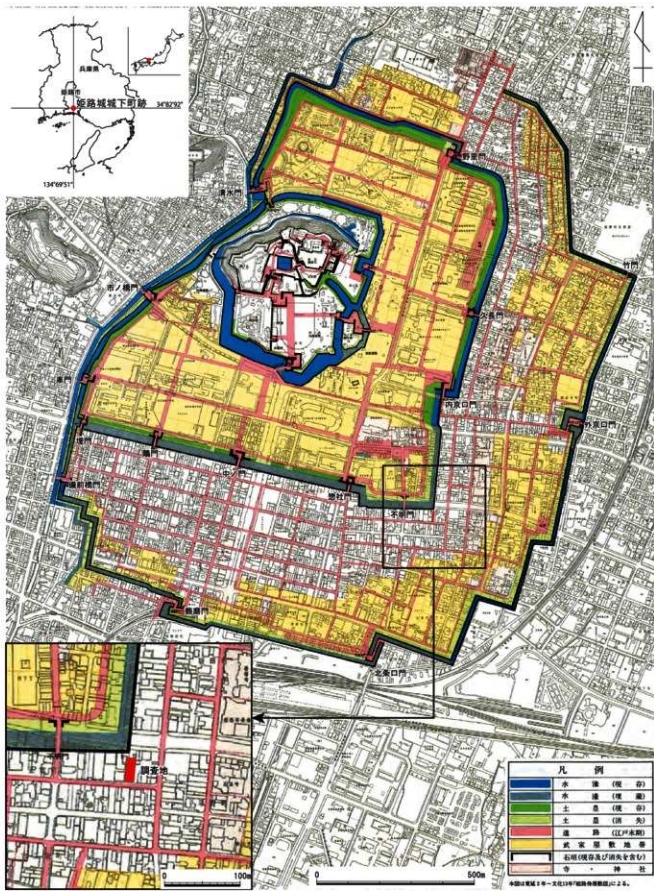
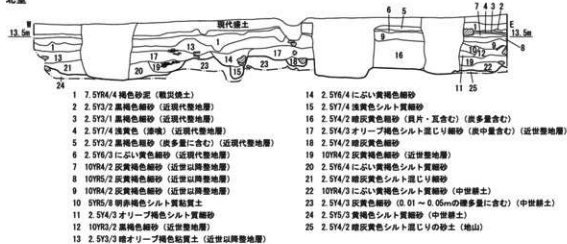
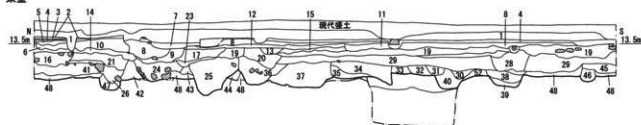


图1 調查地位置图 (S=1: 5,000 · S=1: 12,000)

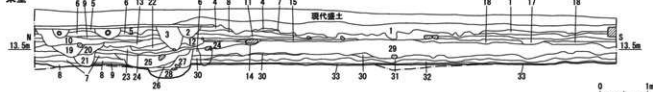
北壁



東壁



東壁



- 1 7. 5YR/4 褐色砂土 (戦国遺土)
 2 2. 5Y3/2 黒褐色しまりない細砂 (近現代堆積層)
 3 2. 5Y2/1 黒褐色しまりない細砂 (近現代堆積層)
 4 5Y6/2 灰白色 (漆喰) (近現代堆積層)
 5 5Y4/3 暗オリーブ褐色しまりない細砂 (近世以降堆積層)
 6 2. 5Y4/4 暗オリーブ褐色砂土 (近世以降堆積層)
 7 10YR3/4 暗褐色砂土 (炭混じり) (近現代堆積層)
 8 2. 5Y4/2 暗灰黄色シルト質細砂
 9 2. 5Y4/2 暗灰黄色シルト混じりのやや粘質な細砂
 10 10YR/4 にぶい黄褐色細砂 (炭多量に含む) (近世以降堆積層)
 11 2. 5Y4/4 オリーブ褐色シルト混じり細砂 (近世以降堆積層)
 12 2. 5Y4/3 オリーブ褐色シルト質細砂 (炭混じり) (近世以降堆積層)
 13 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂 (近世以降堆積層)
 14 2. 5Y4/3 オリーブ褐色シルト質細砂
 15 10Y3/4 暗褐色シルト混じり細砂 (近世以降堆積層)
 16 2. 5Y3/2 黒褐色粘質な砂土
 17 2. 5Y4/2 暗灰黄色シルト混じり細砂
 18 2. 5Y3/1 黒褐色砂土
 19 10YR/4 にぶい黄褐色細砂 (近世堆積層)
 20 2. 5Y4/3 オリーブ褐色細砂
 21 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混じり細砂 (近世堆積層)
 22 2. 5Y5/3 黄褐色固くするシルト質細砂 (近世堆積層)
 23 2. 5Y3/2 黒褐色砂土
 24 10YR/4 暗灰黄色細砂
 25 2. 5Y4/2 暗灰黄色シルト質細砂
 26 5Y5/2 暗オリーブ色粗砂 (SK20 埋土)
 27 2. 5Y4/2 暗灰黄色粗砂 (近世堆積層)
 28 2. 5Y4/3 オリーブ褐色細砂
 29 10YR/3 にぶい黄褐色シルト混じり細砂 (近世堆積層)
 30 2. 5Y4/2 暗灰黄色粘質土
 31 2. 5Y4/3 暗灰黄色シルト混じり細砂
 32 2. 5Y4/3 暗灰黄色シルト質細砂
 33 2. 5Y5/2 暗灰黄色細砂
 34 10YR/4 にぶい黄褐色シルト質砂土
 35 2. 5Y4/2 暗灰黄色シルト混じり細砂
 36 2. 5Y3/2 黒褐色やや粘質な砂土
 37 10YR3/3 暗褐色しまりない砂土
 38 10YR/3 にぶい黄褐色粘質な細砂 (炭多量に含む)
 39 10YR/2 灰黄褐色シルト混じり粘質土
 40 10YR/3 にぶい黄褐色やや粘質なシルト質細砂
 41 2. 5Y4/2 暗灰黄色シルト混じり細砂
 42 2. 5Y5/3 黄褐色シルト混じり細砂
 43 10YR3/3 暗褐色シルト混じり細砂
 44 2. 5Y4/2 暗灰黄色粗砂
 45 10YR/2 灰黄褐色シルト質細砂
 46 10YR/2 灰黄褐色粘質土
 47 2. 5Y3/2 黒褐色砂土
 48 2. 5Y4/3 暗灰黄色シルト質細砂 (中世雑土)

図2 調査区壁面実測図 (S=1:80)

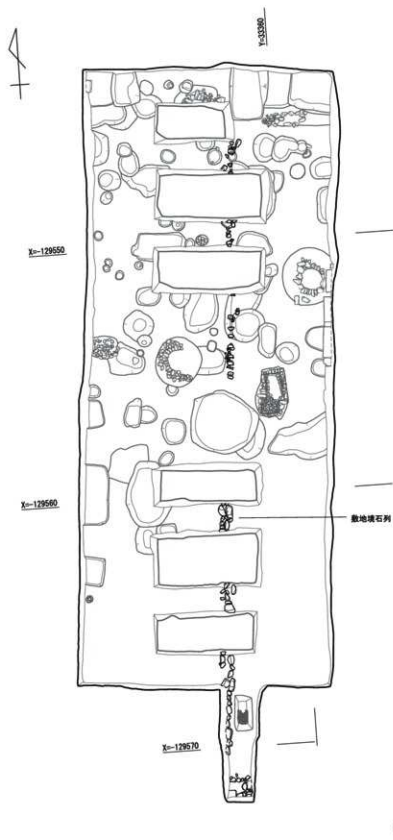


圖3 第1面散地坑石列平面圖 (S=1:150)

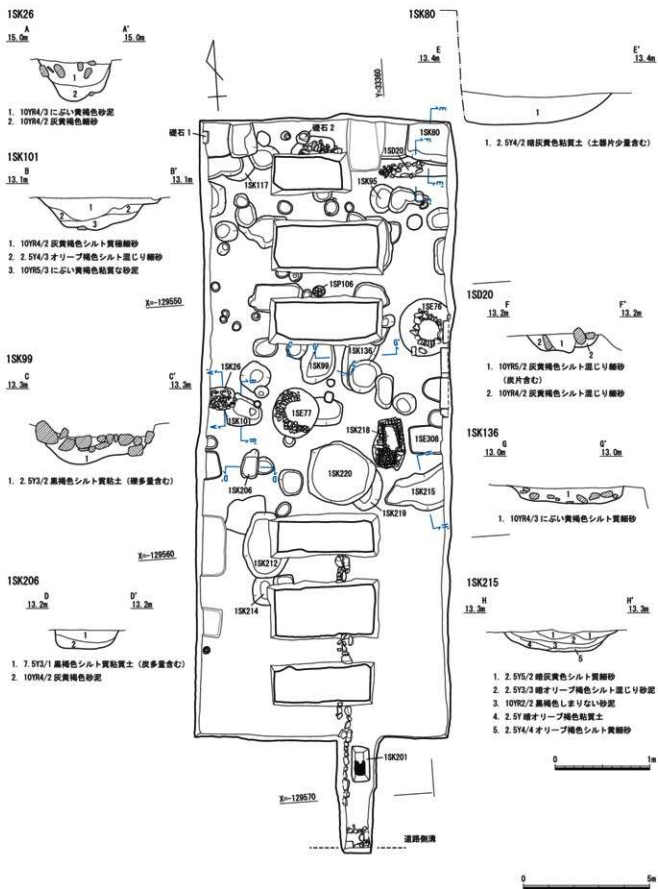
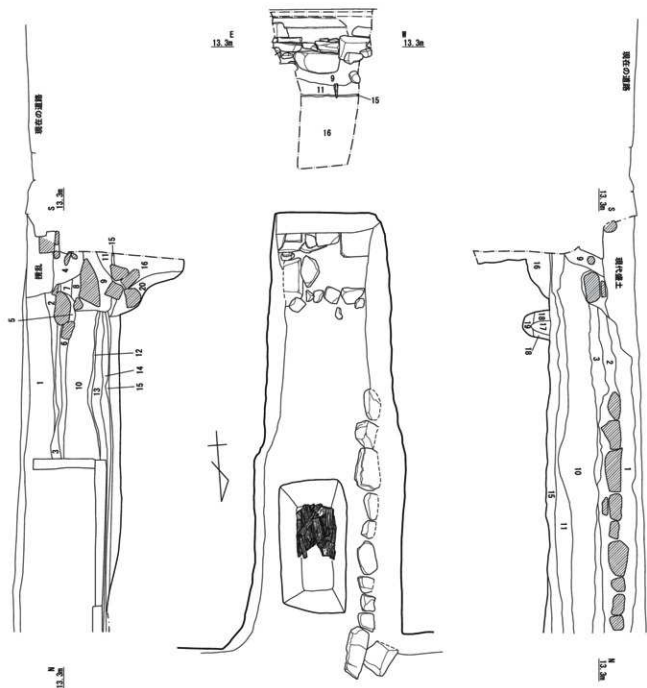


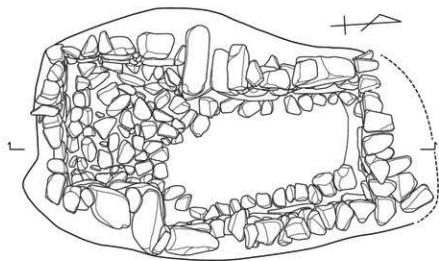
図4 第1面平面図 (S-1:150) ・各遺構断面図 (S-1:40)



- | | |
|---|------------------------------|
| 1 7.5YR4/4 褐色 砂泥 (軽灰粘土) | 11 5Y4/1 灰色粘質土 (中世粘土) |
| 2 10YR5/4 にぶい黄褐色 (近現代整地層) | 12 10YR4/4 褐色細砂 (自然堆積層) |
| 3 10YR4/3 にぶい黄褐色 (近現代整地層) | 13 7.5Y4/6 褐色細砂混じり粘質土 (中世粘土) |
| 4 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 | 14 7.5Y4/6 褐色シルト質粘質土 (中世粘土) |
| 5 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質細砂 | 15 7.5Y3/2 オリーブ黒色粘質土 (中世粘土) |
| 6 10YR4/4 褐色シルト混じり細砂 | 16 7.50Y2/1 緑褐色シルト混じり砂泥 |
| 7 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 (近世以降の整地層) | 17 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質細砂 |
| 8 10YR4/4 褐色シルト混じり細砂 (近世以降の整地層) | 18 10YR4/4 褐色シルト混じり細砂 |
| 9 10YR3/3 暗褐色シルト質粘質土 | 19 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト質砂泥 |
| 10 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (~0.1mの層を多量に含む) (近世整地層) | 20 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質砂泥 (地山) |

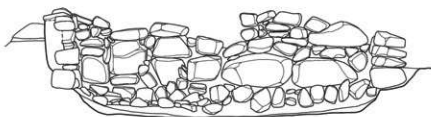
0 1m

図5 道路側溝実測図 (S=1:40)



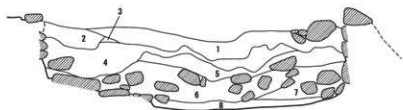
S
13.2m

N
13.2m



S
13.2m

N
13.2m



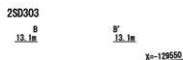
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色しまりない細砂
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂
- 3 2.5Y3/2 黒褐色シルト混じり細砂
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
- 5 10YR4/2 灰黄褐色粘質なシルト混じり細砂
- 6 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
- 7 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色しまりないシルト質細砂
- 8 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘質土 (池底に貼られた粘質土)

0 50cm

図6 1SK218実測図 (S=1:20)



- 1 2.5Y5/3 黄褐色シルト質細砂 (瓦片少量含む)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (瓦片多量含む)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質な細砂 (瓦片含む)



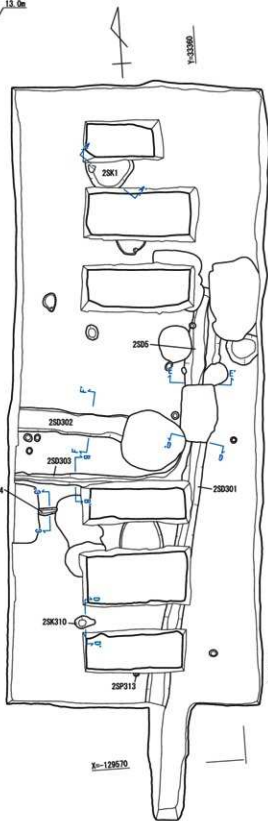
- 1 10YR4/4 にぶい黄褐色シルト質細砂



- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質細砂
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト混じり細砂



- 1 10YR4/4 褐色細砂
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト混じり細砂
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト混じり細砂
- 2 2.5Y5/3 黄褐色シルト質細砂 (2SD5 埋土)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト質細砂 (2SD5 埋土)
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質粘質土



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質細砂
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混じり細砂



- 1 7.5YR4/3 褐色シルト混じり細砂 (2SD301 埋土)
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘質土 (2SD301 埋土)
- 3 10YR5/2 灰黄褐色シルト質細砂 (2SD303 埋土)



図7 第2面平面図 (S=1:150) ・各遺構断面図 (S=1:40)

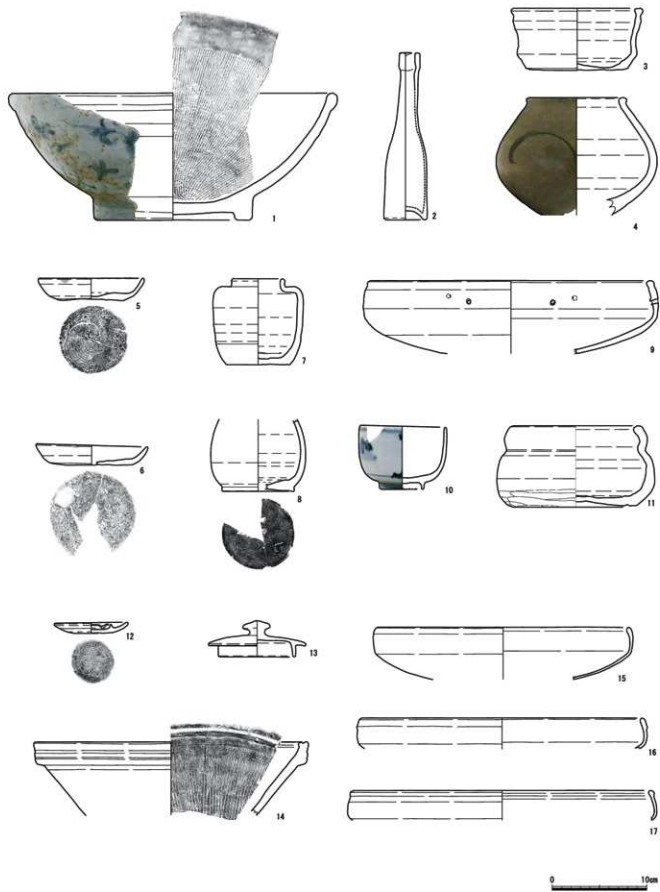


图8 遗物实测图1 (S-1 : 4)

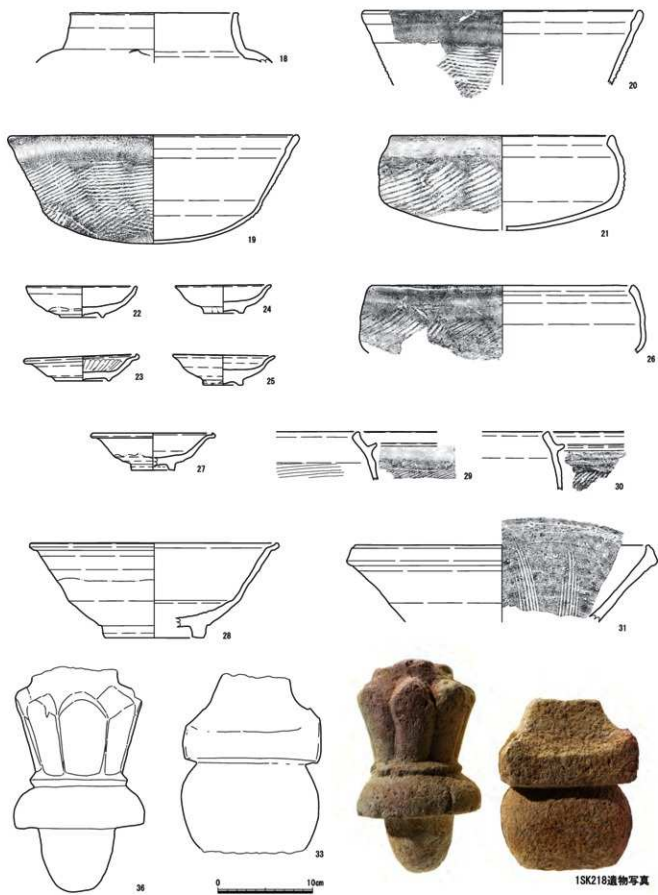


图9 遺物実測図2 (S-1 : 4)

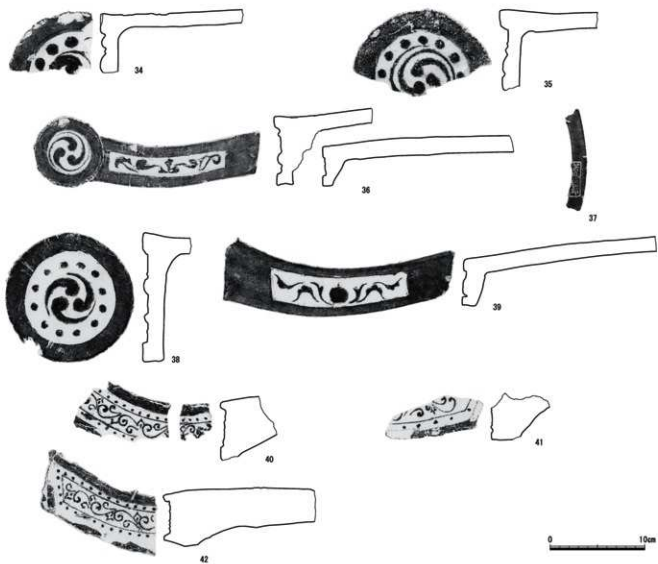


图10 遗物实测图3 (S=1:4)



1SK218遺物写真

2SD5遺物写真

表1 遺物観察表

発掘番号	種別	出土遺構	口径	直径	器高	色調(外)	色調(内)	組成	胎土	調整(外)	調整(内)	備考
1	陶器	直縁筒形	32.4	16.7	13.4	胎輪部: 087/1 無輪部: 2. 015/2	胎輪部: 087/1 無輪部: 2. 015/2	普通	細か	滑石 (高台は別件出)	—	コクロ回転ナブ
2	硝子製品	直縁筒形	1.35	4.6	17.65	緑褐色	—	良好	—	—	—	—
3	陶器	15826	13.5	10.8	6.55	0184/4 ~ 0186/6	0186/6	普通	細か	—	—	コクロ回転ナブ (高台は別件出)
4	陶器	15828	9.8	—	12.4以上	胎輪: 0177/2 ~ 7. 0187/2 裏地部: 7. 0188/4 胎輪部: 0174/1	—	普通	細か	—	—	コクロ回転ナブ (高台は別件出)
5	土師器	15874	10.4	7.15	2.35	2. 0188/2	2. 0188/2	普通	細か	—	—	コクロ回転ナブ
6	土師器	158101	11.75	8.9	2.25	2. 0188/2	2. 0188/2	普通	細か	—	—	回転ナブ
7	陶器	15276	5.3	6.7	14.1	1084/3	2. 0184/3	普通	細か	—	—	コクロ回転ナブ
8	陶器	15805	—	7.7	7.6以上	7. 0185/2	2. 0185/4	普通	細か	—	—	コクロ回転ナブ
9	土師器	15805	29.5	—	7.7	7. 0187/4 ~ 2. 0187/1	0187/6 ~ 10184/2	普通	細か	—	—	回転ナブ
10	磁器	158117	8.9	4.65	6.75	7. 0187/1	7. 0187/1	普通	細か	—	—	コクロ成形
11	陶器	158117	13.1	13.10	8.6	87/ ~ 84/	87/ ~ 84/	普通	細か	—	—	ヨコナブ
12	陶器	15880	7.6	4.5	1.15	2. 0186/4	2. 0185/4	普通	細か	—	—	コクロ成形
13	陶器	15880	10.2	—	3.9	胎輪部: 10186/4 裏地: 10187/4	—	普通	細か	—	—	コクロ成形
14	陶器	15880	28.7	7.7以上	—	1085 / 6	2. 0185 / 4	普通	細か	—	—	コクロ回転ナブ
15	土師器	15880	26.6	26.8	5.0以上	7. 0187 / 4	0187 / 6	普通	細か	—	—	回転ナブ
16	土師器	15880	29.6	—	3.3以上	0187 / 6	0186 / 6	普通	細か	—	—	回転ナブ
17	土師器	15880	31.2	—	3.15	0186 / 6 ~ 2. 0186 / 6	0186 / 6	普通	細か	—	—	回転ナブ
18	瓦質土師	158136	17.8	—	6.25	94 /	93 /	普通	細か	—	—	回転ナブ
19	土師器	158136	30.15	19.9	11.5	—	—	普通	やや粗い	—	—	体部: 平行タタキ
20	土師器	158139	29.2	—	7.85	0186/6	0187/6	普通	細か	—	—	口縁部: ヨコナブ 体部: 平行タタキ
21	土師器	158212	23.3	—	10	7. 0188/6	7. 0183/1	普通	細か	—	—	ナブ
22	陶器	158213	11.5	4.7	3.3	輪: 2. 0183 / 1 裏地: 2. 0184 / 2	—	普通	細か	—	—	コクロ回転ナブ (高台は別件出)
23	陶器	158215	11.8	5.75	2.8	胎輪部: 7. 0184/4 裏地: 10186/1	胎輪部: 7. 0184/4 裏地: 2. 0181/1	普通	細か	—	—	コクロ成形
24	陶器	158214	10	4.2	3	胎輪部: 7. 0172/2 ~ 10187/2 無輪部: 2. 0185/6	胎輪部: 7. 0172/2 ~ 10187/2	普通	細か	—	—	コクロ成形 (高台は別件出)
25	陶器	158214	10.6	4.2	3.25	胎輪部: 7. 0177/3 ~ 7. 016/3 無輪部: 2. 0177/3	胎輪部: 7. 0177/3 ~ 7. 016/3	普通	細か	—	—	—
26	土師器	158214	27.8	—	7.1	7. 0185/3	7. 0185/3	普通	細か	—	—	体部: タタキ
27	陶器	158218	12.6	4.6	3.9	017 / 2	017 / 2	普通	細か	—	—	コクロ回転ナブ (高台は別件出)
28	陶器	158218	25.9	10.3	10	輪: 018 / 3 裏地: 2. 0186 / 4	—	普通	細か	—	—	コクロ回転ナブ (高台は別件出)
29	土師器	2106	—	—	4.65以上	7. 0187 / 6	0187 / 6	普通	細か	—	—	脚部以上: ヨコナブ 脚部以下: タタキ
30	土師器	2106	—	—	6.2	7. 0185 / 4	0186 / 6	普通	細か	—	—	脚部以上: ヨコナブ 脚部以下: タタキ
31	陶器	2106	31.2	—	8.1	2. 0184/2 ~ 2. 0186/4	10184/2 ~ 2. 0184/2	普通	細か	—	—	コクロ回転ナブ
32	石製品	158136	—	—	23.8以上	7. 0188/2	—	—	やや粗い	—	—	—
33	石製品	15277	—	—	19	018/3	—	—	やや粗い	—	—	—
34	瓦(軒丸瓦)	—	—	—	—	—	—	普通	細か	—	—	一石五輪部
35	瓦(軒丸瓦)	近世整地層	—	—	—	—	—	普通	細か	—	—	右巻き三巴文
36	瓦(軒丸瓦)	近世整地層	—	—	—	—	—	普通	細か	—	—	左巻き三巴文
37	瓦(軒丸瓦)	近世整地層	—	—	—	—	—	普通	細か	—	—	軒丸部: 右巻き三巴文 軒先部: 中心部より三番文二回反転唐草文
38	瓦(軒丸瓦)	158201	—	—	—	—	—	普通	細か	—	—	端部側面に「吉瓜在四郎」刻印
39	瓦(軒丸瓦)	158201	—	—	—	—	—	普通	細か	—	—	右巻き三巴文
40	瓦(軒丸瓦)	158201	—	—	—	—	—	普通	普通	—	—	軒先部: 中心部より三番文二回反転唐草文
41	瓦(軒平瓦)	258	1	—	—	—	—	普通	普通	—	—	古大内式
42	瓦(軒平瓦)	258	1	—	—	—	—	普通	普通	—	—	古大内式
43	瓦(軒平瓦)	258	1	—	—	—	—	普通	普通	—	—	古大内式



写真1 北区第1面全景（南から）



写真2 南区第2面全景（北から）



写真3 道路側溝検出状況（北西から）



写真4 道路側溝石列検出状況（西から）



写真5 道路側溝石列検出状況（北東から）



写真6 道路側溝石列検出状況（北から）



写真7 1SD20 検出状況 (東から)



写真8 1SK26土器検出状況 (東から)



写真9 1SK26断面状況 (東から)



写真10 1SK90断面状況 (西から)



写真11 1SE76検出状況 (南西から)



写真12 1SE77検出状況 (北東から)



写真13 1SK101検出状況 (西から)



写真 14 ISK136 検出状況 (南西から)



写真 15 ISK136 石造物出土状況 (南西から)



写真 16 ISP106 検出状況 (西から)



写真 17 ISP106 断面状況 (東から)



写真 18 ISK201 検出状況 (北から)



写真 19 ISK201 底面状況 (北から)



写真 20 1SK218 全景 (北から)



写真 21 1SK218断面状況 (東から)



写真 22 1SK218南面石積み状況 (北から)



写真 23 1SK218堆積状況 (東から)



写真 24 1SK218堆積状況 (東から)



写真 25 1SK206断面状況 (南から)



写真 26 1SK212断面状況 (西から)



写真 27 1SK219・220断面状況 (北から)



写真 28 1SE308検出状況 (南から)



写真 29 北区第2面全景（南から）



写真 30 南区第2面全景（北から）



写真 31 2S05 検出状況 (北から)



写真 32 2SD303 断面状況 (西から)



写真 33 2S05・2SD303 断面状況 (北から)



写真 34 2SD302 断面状況 (東から)



写真 35 2SD304 断面状況 (東から)



写真 36 2SK310 断面状況 (西から)



写真 37 2SK1 断面状況 (西から)

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと								
書名	姫路城城下町跡								
副書名	姫路城跡第375次発掘調査報告書								
巻次									
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告								
シリーズ番号	第62集								
編著者名	山下 大輝								
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター								
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1								
発行年月日	平成30年(2018年)3月31日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	調査番号
		市町村	遺跡番号						
姫路城城下町跡	姫路市元塩町 132番他	28201	020169	34° 82' 92"	134° 69' 51"	2017.4.18 ～ 2017.7.1	210㎡	集合住宅 建設	2017 0030
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構			主な遺物		
姫路城城下町跡	集落跡	古代 中世 近世	土坑 溝 道路側溝石列、敷地境、井戸、 土坑				瓦 土師器・埴輪陶器 土師器・陶器・瓦		
要約	<p>西国街道に面した町人地である元塩町において町屋に関連する遺構を検出した。西国街道に伴う道路側溝の石列を検出し、現在の道路縁石とほぼ同位置であることから、近世段階で西国街道が整備されて以来、現在まで西国街道の北限は踏襲されていることが明らかになった。また町屋間を仕切る敷地境石列を検出した。下層の状況も含めて、近世前期の段階から敷地境が踏襲されている可能性があることが明らかになった。さらに町屋における石組みの池状遺構を検出した。町屋における坪庭に位置するものと考えられ、石組みの一部には色石が使用されていることが明らかとなり、装飾の意図を想定することができた。また下層からは中世の溝を4条、古代の土坑を1基検出し、城下町形成以前の土地利用の一端が明らかになった。</p>								

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第62集

姫路城城下町跡

—姫路城跡第375次発掘調査報告書—
平成30年(2018年)3月31日 発行

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL(079)252-3950

発 行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 株式会社デイリー印刷
〒671-0218 兵庫県姫路市飾東町庄57番地2